

群 教 セ	G02 - 02
	平14. 205集

地域に進んでかかわろうとする 児童を育てる社会科指導の工夫

— 社会的事象を自分の生活とのつながりで

考える活動を通して —

長期研修員 須藤 和明

I 主題設定の理由

社会科では、地域へ出て様々な社会的事象について学習する。社会科における児童の実態を見てみると、子供たちは学校の外へ出て調べる活動が好きで、地域の人に進んで話を聞いたり調べたりしている。しかし、社会的事象を調べて発表することで学習が終わってしまい、学習の深まりが少ない。それは、調べてきたことを基に事象の意味や働きをとらえたり、そこから問題点を考えたりする活動があまりなされなかったことが原因の一つであると考ええる。

また、子供たちと地域とのかかわりが少なくなっている。それは、子供たちが地域のことをよく知らなかったり、かかわりをもとうとしていなかったりするためと考える。そこで、子供たちが、地域の様子や人々の生活など、目に見えるものを調べるだけでなく、調べたことを基に、事象の意味や働き、人々が努力して築いてきた地域のよさ、事象の背景にある人々の願いなどを考え、それらが自分の生活を支えていることに気付いたり、自分の生活と深くつながっていることを認識したりすれば、地域に進んでかかわろうとする児童が育つと考える。

社会科の学習形態は、問題解決的な学習過程をとることが多い。子供たちが地域社会やそこに生きる人々の様々な活動の中から問題を見つけ、主体的によりよく問題を解決しようとする力を養うために、問題解決的な学習が効果的であると考えからである。しかし、これまでの授業では社会的事象の中から問題を見つけたり、問題を追究したり表現したりする際に問題意識や切実感をもたせられない

ことが多かったと考える。

子供たちには、社会的事象に進んでかかわり、その意味や働きをとらえ、自分の生活とのつながりを考えていく力を育てていきたい。そして、地域社会を愛し、地域社会の一員としてよりよい地域をつくっていかうとする心をもってほしいと願う。

以上のことから、問題解決的な学習の過程に、地域の社会的事象を自分の生活とのつながりで考える活動を取り入れ、人々とかかわりながら、自分が地域の中で何ができるのかを考え、進んで地域にかかわっていかうとする児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

地域に進んでかかわろうとする児童を育てるために、問題解決的な学習の過程において、社会的事象を、自分の生活とのつながりで考える活動を取り入れることが有効であることを、実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

問題解決的な学習の過程において、次の1～3のような活動を取り入れれば、社会的事象のとらえ方を身に付け、地域に進んでかかわろうとする児童が育つだろう。

- 1 「しらべる」段階で、今までとらえていた自分の生活とのつながりや共通点、相違点を基に、社会的事象を調べる活動を取り入れれば、自分なりの見方で、社会的事象と自分の生活とのつながりに、気付いたり再発見したりするだろう。

2 「ふかめる」段階で、自分や友達のとらえた社会的事象とのつながりを比較して、関連性を考える活動を取り入れれば、再構成した自分の見方で、社会的事象と自分の生活との間に複数のつながりがあることに気付くだろう。

3 「ひろげる」段階で、自分が地域に対してできることを地域の人に伝え、感想や意見をもらう活動を取り入れれば、多面的な見方で社会的事象と自分の生活とのつながりを見つめ直し、社会的事象の働きや地域での自分の役割に気付くであろう。

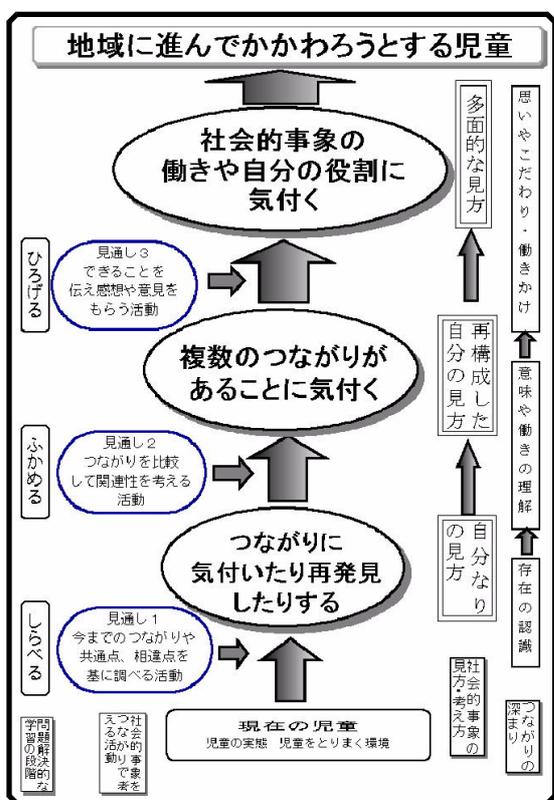


図1 研究基本構想図

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 地域に進んでかかわろうとする児童について

ここでは、地域を校区内または市内、県内など、子供たちが直接出かけていき、観察調査ができる範囲ととらえる。地域に進んでかかわろうとする児童とは、地域に対する自分

の願いをもち、自分が地域の中で何ができるか考え、できることを実行していきたいと願う子供である。そして、地域に生きる一人であることに気付き、地域社会は自分にとってかけがえのない存在だと感じたり、地域社会の中で生きていきたいと願ったりする子供であると考ええる。

(2) 社会的事象を自分の生活とのつながりで考える活動及びつながりの深まりについて

社会的事象とは、社会科で学習の対象とするもののことで、人間に関するもの、人間の行動に関するもの、人間を取り巻く環境に関するものにとらえる。社会的事象を自分の生活とのつながりで考えると、事象の成立や事象が社会に与える影響、役割などを調べたり、考えたりする際に、自分の生活を基にして事象との関係をとらえることである。それにより、将来地域社会に対して自分のできることを考え実践していったり、地域の問題点を見つけ積極的に解決していくようになったりすると考える。社会的事象に対するつながりの深まりについては、自分の中に事象に対する意識がどのようにあるかという視点で、表1のように考えている。「しらべる」段階や「ふかめる」段階で、社会的事象に思いやこだわりをもったり、働きかけようとしたりする（第3段階）児童もいると考えるが、ど

表1 つながりが深まる子供の姿

段階	【存在の認識】の段階
第1段階	社会的事象の存在を自分の生活経験の中で認識している。 ・聞いたことがある。・行ったこと、見たことがある。・さわったことがある。・やったことがある。・調べたことがある。
第2段階	【意味や働きの理解】の段階 社会的事象の意味や働きなどが分かる。 ・いつできたか知っている。・どんなものか分かっている。・問題点を知っている。・どんな役割があるか知っている。・人々の工夫が分かる。
第3段階	【思いやこだわり、働きかけ】の段階 社会的事象に対して、自分の思いやこだわりがあったり、働きかけようとしたりする。 ・事象に対して、自分の思いをもっている。 ・事象に対して、働きかけようとしている。

の児童にも単元を通して自分の生活とのつながりを深めてほしいと願う。また、「つなが

りで考える活動」については、問題解決的な学習の段階ごとに表2のように考えている。

表2 つながりで考える3つの活動

活動1	今までとらえていた自分の生活とのつながりや他の事象との共通点、相違点を基に、社会的事象を調べる。
活動2	調べたことや考えたことを発表し合い、自分や友達のとらえた社会的事象とのつながりを比較して、関連性を考える。
活動3	地域社会や地域の人々に対して、自分にできることを考え、それを地域の人々に伝え、感想や意見をもらう。

(3) 社会的事象の見方、考え方を身に付けることについて

本研究では、問題解決的な学習の過程で、児童に社会的事象の見方や考え方を身に付けていく(図1参照)。「しらべる」段階で身に付ける「自分なりの見方」とは、社会的事象のいくつかの面を自分の生活経験を基にしてとらえていく見方である。この見方は社会的事象を今まで考えていた見方で再認識したり、新しい見方で再発見したりするが、自分なりの一面的なとらえ方と考える。

「ふかめる」段階では、「再構成した自分の見方」を身に付ける。友達との交流の中で、友達が自分の中になかった見方で社会的事象をとらえていることを知る。そして、自分の中で新たに社会的事象のもつ時間的な面、距離的な面、働きの面、人の活動の面など今までと違った見方で社会的事象をとらえようとする。それを「再構成した自分の見方」と考える。再構成した見方は、社会的事象のもつ複数の面をとらえるが、とらえようとしているところは自分自身の立場からで、自分という場所から社会的事象をとらえると考ええる。

「ひろげる」段階では、「多面的な見方」

を身に付ける。社会的事象には、その意味や働きなど様々な面がある。それらをとらえるためには、自分や友達の見方だけではなく、それ以外の第三者(地域の大人など)から見たとらえ方を知ることが大事だと考える。社会的事象の複数の面をより深く見ていったり、複数の視点から総合的にとらえていったりする見方を「多面的な見方」と考える。多面的な見方が身に付いたとき、社会的事象について理解はより深まり、地域に働きかける力は強くなると考える。

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、次の計画で授業実践を行い検証する。

(1) 授業実践計画

教科	社会科
対象	富岡市立一ノ宮小学校4年 34名
単元	古くからつたわるもの(13時間)
期間	平成14年10月初旬~11月中旬
授業者	長期研修員 須藤 和明

(2) 抽出児童

Aさん	1学期、浄水場について調べ、自分たちが使っている水がどのような経路できれいになり、家庭に送られてくるのか調べることができた。本単元では、「つながりカード」を利用し、友達との交流を通して自分と違ったとらえ方に触れることにより自分の生活と社会的事象とのつながりを見いだすことができるだろう。
Bさん	1学期、ごみのしまつと利用について調べ、清掃センターの仕事やごみのリサイクルについて理解することができた。本単元では、社会的事象と自分の生活との複数のつながりを見だし、地域の人々とかかわることで、知識として理解するだけでなく、地域社会に対してできる自分の役割を具体的に考えられるだろう。

(3) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1 (しらべる段階)	今までとらえていた自分の生活とのつながりや、他の事象との共通点、相違点を基に、地域の文化財や年中行事を調べる活動を行ったことは、自分なりの見方で、文化財や年中行事と自分の生活とのつながりに、気付いたり再発見したりすることに有効であったか。	○「学習カード3」(調べること、共通点、相違点を書く)での分析 ○「つながりカード」(調べる前と調べた後のつながりの変化を考えて書く)での分析 ・調べる前と後でつながりのとらえ方を比較する。(つながりの発見やつながりの再発見があったか。)
見通し2 (ふかめる段階)	調べたり考えたりしたことを発表し合い、自分や友達のとらえた文化財や年中行事とのつながりを比較して関連性を考える活動を行ったことは、再構成した自分の見方で、文化財や年中行事と自分の生活との間に複数のつながりがあることに気付くために有効であったか。	○「つながりマップ」(自分と文化財や年中行事、文化財や年中行事同士のつながりを線で結び、結んだ理由を書く)の分析 ・つながりをとらえ、線が引けたか。線を引いた理由が書いているか。友達のとらえ方を参考にして、再構成した自分の見方でとらえているか。

見通し3 (ひろげ る段階)	文化財や年中行事を守る人々や地域社会に対して自分ができることを考え、地域の人々に伝え、感想や意見をもらう活動を行ったことは、多面的な見方で文化財や年中行事と自分の生活とのつながりを見つめ直し、文化財や年中行事の働きや地域社会での自分の役割に気付くことに有効であったか。	○「学習カード7」(文化財を守る人々や地域のために自分ができることを書き、地域の人に感想、意見を書いてもらう)の分析 ○「学習カード8」(つながりを考えながら、文化財や年中行事のことをどう考えるか書く)の分析 ・一面的なとらえ方か、地域の人々の見方を考えた多面的なとらえ方をしているか。
----------------------	--	---

V 研究の展開

1 単元名 「古くからつたわるもの」

2 単元の考察

本単元は、学習指導要領第3学年及び第4学年の内容(5)「地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上につくした先人の働きや苦心を考えるようにする」の「イ 地域に残る文化財や年中行事」に相応している。

ここでは、子供たちが、地域の人々に昔から受け継がれてきた文化財や年中行事について調べて、生活の安定と向上に対する地域の人々の願いを考える。文化財は、その地域の歴史を伝えてくれる。そこには、文化財の保存に取り組んでいる地域の人々の努力が見られる。地域社会は、そのような人々の努力によって支えられている。また、地域に残る年中行事には、人々の楽しみとともに地域の生産活動や地域の発展、人々のまとまりなどへの願いが見られる。児童がこのような文化財や年中行事を調べることで、自分が住んでいる地域には、昔から人々が努力をし、願いな

がら受け継いできたり、守り続けてきたりしたのがあり、自分たちの生活は、そのような人々によって支えられてきたということに気付くだろう。本単元を学習することにより、子供たちはそのような人々の願いや生き様に出会い、かかわり、自分たちが地域社会に対してできることを考え、実行しようとする気持ちをもつようになると考える。そして将来自分たちも文化財や年中行事を受け継いでいくような進んで地域にかかわる子供に成長していくと考える。

また、本単元では、子供たちが社会的事象の見方、考え方を学ぶことができると考える。文化財や年中行事と自分の生活とのつながりを、自分なりの見方や再構成した自分の見方、多面的な見方で考え、社会的事象の意味や働きをとらえることができると考える。

3 目標

地域に残る文化財や年中行事を見学したり調査したりして調べ、それらに込められた地域の人々の願いを考え、理解できるようにするとともに、地域社会で生活する一人として自分にできることを考える。

4 指導と評価の計画 (13時間計画)

次程	○ねらい 次程の()内は、扱い時間数	評価方法等
第1次 (1時間扱い) (1/13)	○地域に残るいくつかの文化財や年中行事と出会い、自分の生活とどのようなつながりがあるか考える。	☆写真等で見た地域の文化財や年中行事と自分の生活とのつながりを自分なりに考えて書いているか、学習カードの記入内容の分析を通して評価する。(関心)
第2次 (1時間扱い) (2/13)	○文化財や年中行事について、自分なりのつながりや、疑問点や驚きなどを基に、学級共通の学習課題を考える。	☆疑問点や驚き、知りたいことなどを基に、明確な共通学習課題を考えているかを学習カードの記入内容の分析を通して評価する。(思考)
第3次 (2時間扱い) (3~4/13)	○何を調べるか調べる視点をいくつか考え、調べたいことについて、根拠を明らかにして予想を立てるとともに、調べる計画を立てる。	☆文化財や年中行事の特色を調べる視点に着目して、なぜそのように考えるのか予想を立てているかを学習カードの記入内容の分析を通して評価する。(思考)
第4次 (2時間扱い) (5~6/13) (見通し1)	○文化財や年中行事の特色を、今までのとらえ方や共通点、相違点を基に調べたり、文化財や年中行事と自分の生活とのつながりを考えたりする。 ・グループごとに校外へ出て、自分たちで立て	☆文化財や年中行事を、具体的に調べて、人々の工夫や努力など、事実を調べているか、学習カードの記入内容・収集した資料の分析、児童の行動観察を通して評価する。(技能) ☆文化財や年中行事と自分の生活とのつながりに関

	た計画に沿って、自分たちの予想したことを検証してくるという意識で調べてくる。 ・文化財や年中行事について調べ、今までの共通点、相違点をとらえる。	て、共通点、相違点を基に考え自分の生活とのつながりがあることを分かっているか、学習カードの記入内容の分析を通して評価する。(知識・理解)
第5次 (2時間扱い) (7~8/13)	○調べたことや考えたことを自分なりの方法でまとめたり、発表するための準備をしたりする。	☆自分が調べた過程や結果を、分かりやすく表や図や文章にまとめているか、発表用にまとめた資料の分析を通して評価する。(技能)
第6次 (2時間扱い) (9~10/13) (見通し2)	○調べたことや考えたことを発表し合い、自分や友達のとらえた事象とのつながり进行比较し、関連性を考えることにより、再構成した自分の見方で事象と自分の生活との複数のつながりに気付く。 ・文化財や年中行事と自分の生活、文化財同士のつながりを「つながりマップ」にまとめる。	☆調べたり考えたりしたことをまとめた図や地図などを使って、発表しようとしているか、行動観察を通して評価する。(意欲) ☆自分の生活と文化財や年中行事などについて複数のつながりがあることに気付いているか、つながりマップに記入した図の分析を通して評価する。(思考)
第7次 (1時間扱い) (11/13)	○古くから伝わるものを守り、受け継いできた人々の思いや願いを考え、話し合う。	☆文化財に込められた人々の願いを考えているか、学習カードの記入内容の分析を通して評価する。(思考) ☆文化財を守る人々の思いや願いを考え、願い、愛情を理解できたか、学習カードの記入内容の分析を通して評価する。(知識・理解)
第8次 の① (1時間扱い) (12/13) (見通し3①)	○自分のできることを考え、それを地域の人々に伝え、感想や意見をもらう。 ・自分のできることを考え、誰に伝え、感想をもらうか考える。 ・地域の人に伝え、感想、意見等をもらうのは、課外とする。	☆自分が生活している地域社会に対する思いをもち、地域にできることを考えて、行動しようという気持ちをもっているか、学習カードに記入した内容の分析を通して評価する。(態度)
第8次 の② (1時間扱い) (13/13) (見通し3②)	○文化財と自分の生活とのつながりを多面的な見方で見つめ直し、文化財の働きに気付く。 ・地域の人から自分の考えに対してもらった感想、意見を発表し合う。 ・自分と文化財や地域とのつながりについて思いをまとめる。	☆文化財や年中行事、それらを受け継いできた人々と自分の生活とが様々なつながりをもっていることをとらえているか、学習カードの記入内容の分析を通して評価する。(知識・理解)

注：単元の評価規準、指導と評価の計画と評価規準との関連および観点別評価についての考え方等については、本報告書資料編を参照

VI 研究の結果と考察

1 今までとらえていたつながりや共通点、相違点を基に、文化財や年中行事を調べる活動を行ったことは、自分なりの見方で、文化財や年中行事とのつながりに、気付いたり再発見したりすることに有効であったか

第1次で児童は自分の生活といくつかの文化財(光明院、貫前神社、朝日観音、獅子舞、旧茂木家、富士神社、地獄谷、施無畏寺、開田の碑、堂山稲荷古墳)とのつながりについて考えた。その後調べたいものごとに班をつくり、調べる項目や他の文化財との共通点、相違点を考え、それらを基に文化財や年中行事について調べてきた。

Aさんは、今までのつながりを基に光明院を調べた。初め、光明院とのつながりを、祖父母の家の近くという距離的な面から、また幼稚園の頃から遊んでいたという自分の生活

経験の中でのかかわりの面からとらえていた(資料1)。そして実際に光明院へ調べに行き、光明院と祖父母の家が両方見える場所へ来たとき、教師が祖父母の家はどこにあるか聞くと、「あれがおじいちゃんちだよ。近いでしょ。」と距離的な面からのつながりを再認識している。Aさんはまた光明院について、その名前が貫前神社の神主だった光明という人からとったという由来や、光明院が2回火事になって1781年に今の建物ができたという時間的な面、お寺では本尊を一番大事に守っているという、光明院に住む人やだんかの人々の働き

資料1 Aさんが初めにとらえたつながり

光明院のひ	見たことがある
どうやって調べたか	
光明院	おじいちゃんちの近くにある
ぬきさきしんじゆ	おじいちゃんちの近くにある
朝日観音	
(しま)	おじいちゃんちの近くにある
旧茂木家	見たことがある
地獄谷	
富士神社	
せむし寺	

りについては、「存在の認識」の段階（表1）でとらえていると考える。それに対して10人は、つながりがないととらえていた（表3）。

表3 児童が初めてとらえたつながり(34人)

児童がとらえたつながり	人数
聞いたことがある	3
見たり、行ったりしたことがある	15
家族がかかわっている	3
参加したことがある・している	5
近所にある	2
つながりがない	10

普段の生活経験の中では、地域の文化財をあまり意識していなかったと考える。児童の考えた他の文化財や年中行事との共通点、相違点については、表4のようになり、児童のとらえ方は様々であることが分かる。こ

表4 児童のとらえた他の文化財との共通点と相違点(34人)

児童の考えた共通点	人数
昔から伝わる古いもの	11
建物	8
同じ機能を持っている	6
守る人	5
踊り	3

児童の考えた相違点	人数
踊りがあることとないこと	15
お寺や神社などの種類	8
建物の形や大きさ	7
守っている人	3
場所	1

れら今までのつながりと、共通点、相違点を基に調べたことで、児童は文化財や年中行事とのつながりを再発見した。表5のように、初めてつながりをとらえていた児童は、調べた後、文化財や年中行事の今までとらえていなかった複数の面ををとらえたと感じる児童が一番多かった。つながりについてのとらえ方は児童なりに様々であることが分かる。これは、共通点や相違点のとらえ方にも表れているように、自分なりの見方で再発見ができたと感じたからだろう。つながりをとらえていなかった10人の児童は、自分なりに様々な発見をしているが、つながりをとらえていた児童よりも、「思いやこだわり、働きかけ」の段階（表1）に割合が多くなっている（表5；ウ、エ、オ）のは、調べたときに新しい発見によって、より感動を覚えたためと考える。以上のことから、今までのつながりや共通点、相違点を基に事象を調べたことは、自分なりの見方で、文化財や年中行事とのつな

がりに、気付いたり再発見したりすることに有効だったと考える。

表5 再発見した文化財とのつながり(34人)

再発見したつながり	Y	Z
ア見たり聞いたり体験したりした	4	1
イ今までと違う複数の面をとらえた	11	3
ウ自分の思いをもった、感心した	5	4
エまた行きたい、もっと知りたい	3	2
オ守る人になりたいと思った	1	0
合計	24人	10人

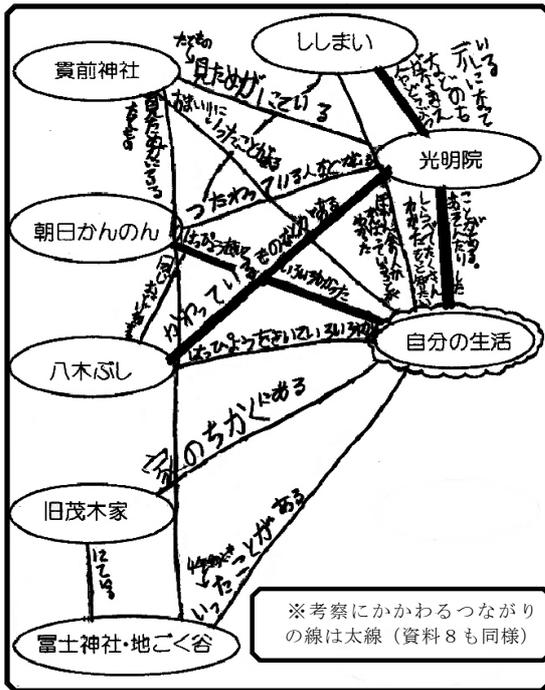
※Y；初めてつながりをとらえていた児童の再発見
Z；つながりをとらえていなかった児童の発見

2 文化財や年中行事について、調べたり考えたりしたことをグループごとに発表し合い、自分や友達のとらえたつながりを比較して関連性を考える活動を行ったことは、再構成した自分の見方で文化財や年中行事と自分の生活との間に複数のつながりがあることに気付くために有効であったか

児童は、文化財や年中行事について調べたりつながりについて考えたりしたことについて、グループごとにポスターセッションにより発表し合った。聞く側の児童には、自分との関連性をとらえやすいように、友達の考えているつながりをよくメモをとりながら聞くように指導した。児童はこのメモを基に、つながりの関連性を考えながら、つながりマップに文化財と自分のつながり、文化財同士のつながりがあるものについて線で結び、その理由を書いた。ここでは、第1次で提示しなかった八木節以外の児童が調べた文化財（光明院、貫前神社、獅子舞、朝日観音、茂木家、富士神社・地獄谷）とのつながりについて考察する。

Aさんは、初め自分とのつながりがないと考えていた朝日観音について、つながりマップに「発表を聞いていろいろわかった」と書いたので、友だちの発表でどんなことが分かったのか聞くと、時間的な面の「観音様は350年～400年前に作られた。建物は、50～60年前に建てられた」とことと、歴史的ないわれの面の「昔と名前が変わった」ということが分かったと答えた。自分たちが光明院を調べた際の造られた年代と、名前のいわれなどとの関連を考えながら、朝日観音とのつながりを再構成した自分の見方でとらえたと考える。また、光明院とほかのものとはつながりがな

資料7 Aさんのつながりマップ



いか、友達が発表したつながりを思い出してみるように話すと、獅子舞や貫前神社、朝日観音、八木節とのつながりを考えた。獅子舞は動物が名前の由来になっていることを聞き、自分が調べた光明院の名前も貫前神社の神主の名前がもとになっていることを思い出し、光明院と獅子舞を再構成した自分の見方でつながりをとらえた。八木節についても発表を聞いて、八木節は曲はずっと変わらないが楽器は傷んだりするので、昔に比べれば変わったと分かり、光明院の敷地や建物が昔と比べると変わったと調べて分かったので、2つの文化財のつながりをとらえられたと考える(資料7)。

Bさんは、資料8のように初めにつながりがないととらえていた富士神社・地獄谷について「発表で聞いた」とつながりをとらえた。友達の発表でどんなことが分かったのか聞くと、文化財の昔と今の変化や文化財の保護に関する問題の面の「地獄谷は以前は33個あった石仏が31個になってしまった」ことや文化財と自分たちの生活とのかかわりや文化財の働きの面の「富士神社は日本人の心のよりどころで、神農原をよくしようとして造られた」ことが分かったと答えている。友達の発表を

聞いて、富士神社や地獄谷を新たに複数の面からとらえることができたと考える。また、一ノ宮駅を新たに自分とつながりがあると考えた。普段出かけるときによく見ていた一ノ宮駅が古い建物だということを思い出し、再構成した見方で、交通の面、施設の働きの面からつながりをとらえたと考える。貫前神社と獅子舞は、調べる前から獅子舞を踊る共通点をとらえていたが、八木節の踊りを忘れてしまうことがたいへんだということを知った友達の発表を聞き、無形文化財の一つである踊りという面で新たに3つの文化財のつながりをとらえている。また、旧茂木家と光明院を「昔建てられたもの」という面からつながりをとらえた児童の発言を聞いて、Bさんは貫前神社と光明院、旧茂木家を「たてもの」という面から再構成した自分の見方でつながりをとらえた。これらは、自分の生活と文化財や年中行事の直接のつながりばかりでなく、調べた文化財から、再構成した自分の見方で違う文化財につながりを見いだしたもので、友達のとらえたつながりを比較して関連性を考えることは、再構成した見方で文化財や年中行事をとらえることができ、複数のつながりに気付くために有効であった。

学級全体では、全員の児童が文化財と自分

資料8 Bさんのつながりマップ

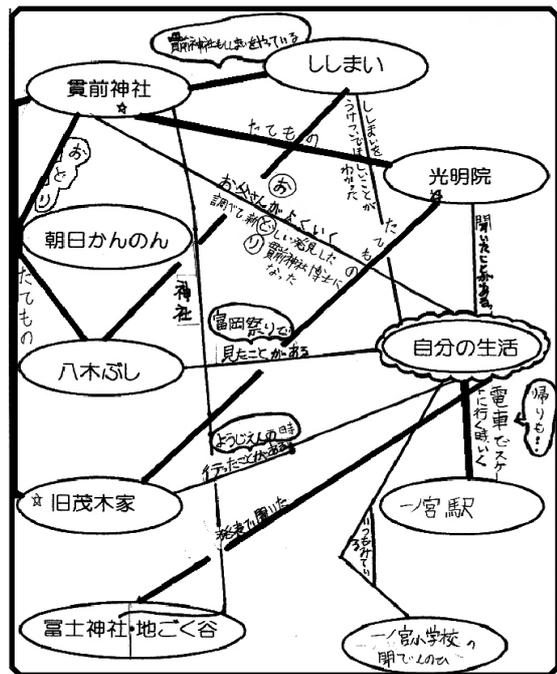


表6 発表後、6つの文化財とのつながり、
文化財同士をつなぐりとらえた人数

結んだ線の数	調べる前のつながり	自分の生活とつながり	事象どうし のつながり
9			2
8			1
7			1
6	3	8	4
5	1	5	8
4	4	13	6
3	5	8	6
2	10	0	3
1	9	0	3
0	0	0	0
合計	34人	34人	34人

の生活との間に複数のつながりがあることに気付いた。初めに6つの文化財とのつながりをとらえている児童は、表6のようにつながりを線で結んだ文化財の数が2本または1本が多く、平均すると1人が2,5本であった。関連性を考えた後は、つながりが4本になった児童が一番多く、結んだ線の数を平均すると1人が4,4本になった。また、文化財同士のつながりをとらえ、線で結んだ数は平均すると4,4本になった。児童は、文化財同士のつながりを建物、踊り、時間的な古さなど、いくつかの面から再構成した自分の見方でとらえた。児童は、友達のとらえと比較し、関連性を考えたことにより、再構成した見方でつながりをとらえ、複数のつながりに気付いたと考える。

3 文化財や年中行事を守る人々や地域社会に対して自分ができていることを考え、地域の人々に伝え、感想や意見をもらう活動を行ったことは、多面的な見方で文化財や年中行事と自分の生活とのつながりを見つめ直し、文化財や年中行事の働きや地域社会での自分の役割に気付くことに有効であったか

自分の生活と文化財や年中行事との複数のつながりに気付いた児童は、獅子舞保存会の方と一緒に、文化財を守ったり受けついでる人々の工夫や努力を考え、それらに込められた思いや願いを考えてきた。そして文化財や年中行事を守る人々や地域のために自分にできていることを考え、それを地域の人に伝え、感想や意見をもらった。その際つながりマップに表したつながりを見つめ直し、文化財に対する思いを強くもたせるように支援した。

Aさんは、八木節について、先人の働きと八木節のいわれの面や、昔と今を比較した違いの面、人々の工夫や努力の面から見つめ直し、自分のできることを「八木ぶしのことを調べて、まだ八木ぶしを知らない人におしえてきょうみをもたせたりする」と考えた。自分が調べた光明院については、距離的な面、歴史的な面、光明院の名前の由来の面のほかに、寺を守る人々やだん家の人たちの工夫や努力の面から見つめ直し、自分にできることは「光明院の周りのごみをひろう。光明院の周りにごみをすてないでというポスターをはる」ということを考えた。また、獅子舞についてど

うしよ
うかと
考
えて
いたの
で、保
存会
の

人の願いを思い出すように話すと、「人数が少なくおどったり受けついでるのがたいへんだから、もっと多くの人が保存会に入ってほしいだろう」と前次の学習カードに自分が考えて書いたことを思い出し、自分のできることは、多くの人に「ししまいのことを話してあげる」と考えた（資料9）。このようにAさんは、自分と文化財のつながりを見つめ直し、自分の役割を考えることができた。Aさんは自分のできることを母親に伝え、「ごみをひろったり、ポスターを作ったり、古くから伝わるものがきれいになるということはすばらし

い。自分で
考えたこと
をぜひ実行
してほし

い。」という感想や意見をもらった後、資料10のような思いを書いている。文化財を守り、受け継ぐ人々の働きの面から光明院をとらえ直し、多面的な見方で文化財を見つめ直していると考えた。

Bさんは、貫前神社について見つめ直した。人々はどんな努力をしていたか考えるように

資料9 Aさんの自分のできること

八木ぶしのことを調べてまだ八木ぶしを知らない人におしえてきょうみをもたせたりする
光明院の周りのごみをひろう
光明院の周りにごみをすてないでというポスターをはる
関田のひざふいたり
ししまいのことを話してあげる

資料10 Aさんの光明院への思い

火事があったのにたてをぶささかてさすこいなあと思っています(2回火事被害)
光明院の人のことを思っています

話すと、神社や森の掃除をしている人々の努力や文化財保護の面を見つめ直し、自分のできることを、文化財や文化財のある場所を「そうじしたり、きれいになるまでごみ拾いをする」ことや、文化財の働きの面から自分の役

資料11 Bさんの自分にできること

・おそうじ ・おまいり ・ごみ拾い(きれいになるね...)

割として、「おまいり」をすることと考えた(資料11)。Bさんは、貫前神社で働く人々が普段から森や境内をきれいにしていることを見つめ直し、自分の役割を考えたのだろう。Bさんは自分のできることを母親に伝え、「自分の気が付いたことを進んですることが人間としてのマナー。歴史の一環として祭りの役割も学んでほしい。」という意見をもらった。母親の言う祭りを守り続ける人のことをもう一度考えてみるように話すと、文化財を守っている人々のことを、「何年も守りつづけていてすごい。古くから伝わるもののおこをいっぱい知って、少しでもいいからつながりをもちたい」と考えている。これは、文化財や年中行事を守る人々が、工夫や努力をしながら、願いをもちながら受け継いだり守り続けてきたことを、母親からの意見などから、多面的な見方で見つめ直し、もっとつながりをもちたいと思うようになったと考える。

表7 地域の中で自分にできること(複数記述)

児童の考えたこと	人数
文化財の周りを掃除したり、花を植えたり、ポスターをはったりする。	21
文化財のよさや守っている人々の努力、願いなどを多くの人に伝える。	8
自分が保存会に入って、守ったり受け継いだりする。	6
文化財を守っている人々の手伝いをしたり応援したり、お客さんを出迎えたりする。	6
文化財を訪ねたり、お参りに行ったりする。	2

全体的には、児童は自分にできることを表7のように考えた。また自分にできることを伝えた相手は、家族が最も多く、自分が調べるために聞きに行った人に伝えた児童もいた。伝えたことにより児童は、文化財を守るという立場から自分の役割を考えたり、地域に古くから残るものに対する誇りと愛情の表

れから役割を考えたりしている。さらに、文化財の継承者としての意識の面から自分の役割を考えている児童も見られた。以上のことから地域の人へ自分のできることを伝えて、感想や意見をもらう活動を行ったことは、文化財や年中行事の働きをとらえ、地域社会に対する自分の役割に気付くために有効であったと考える。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

- 文化財や年中行事について調べたり、発表したり、考えたりする活動により、児童は、それらと自分の生活とのつながりの深まりを感じる事ができた。初めは地理的な位置や距離的な面、生活経験の広がりなどの面から文化財をとらえていた(「存在の認識」の段階)が、しだいにいわれや取り組みの人々の努力、願いなどの面をとらえるようになり(「意味や働きの理解」の段階)、自分の思いやこだわりを感じながら、地域での自分の役割に気付いてきた(「思いやこだわり、働きかけ」の段階)。つながりの深まりによって、児童は地域への愛情を感じ、地域に進んでかかわろうとすると考える。
- 問題解決的な学習の過程で、児童が社会的事象の見方、考え方を身に付けてきた。「しらべる」段階で自分なりの見方で、「ふかめる」段階で再構成した自分の見方で、「ひろげる」段階で友達や地域の大人の見方、考え方を知り、多面的な見方で文化財や人々をとらえるようになった。これらによって地域の社会的事象に対するかかわり方が、積極的になっていくと考える。
- 社会的事象の多面的な見方や事象とのつながりの深まりをどこまで追究するのか、児童の発達段階に応じ、系統性をもっていかに進めていけばいいのか、今後の課題として取り組んでいきたい。

<参考文献>

- ・藤井 千春 著 『問題解決学習のストラテジー』 明治図書(1996)